大分県芸術文化振興会議会報

芸才振

No.26　50. 3

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・米　田　貞　一　　編集人・矢　野　朔　雄

ソロモンの裁判

大分と日本最初の洋劇

上　田　　保
マリーン・パレス社長

1560年のクリスマスに府内（大分市）のカトリック教会では日本最初の西洋劇が演ぜられた。と出し抜けに言ってもピンと来ない向きもあろうかと思うので、少し時代考証をして見る。この年は日本では永禄３年で、織田信長が桶狭間に今川義元を破った年である。又ここ府内ではこの地にキリスト教を伝えたフランシスコザビエルが去って９年目に当り、９年間にザビエルが蒔いた信仰の種は見事に開花して、信者は日毎に増え、西洋文化は盛んに移植され、早くも洋式病院が建ち外科手術さえ行なわれ、ビオラやオルガンの伴奏で少年合唱隊の歌声が教会の窓から流れると言う、異国情緒豊かな文化都市を現出していた。さればこそクリスマスに教会で日本最初の洋劇が演ぜられたとしても別に何の不思議もないわけである。

写真：“ソロモンの裁判”の場面のレリーフ「西洋劇発祥記念碑」として大分市遊歩公園に昨年設置
製作者／東京芸術大学教授　般越保武・寄贈　上田保

日本演劇史上に洋劇の誕生と言う画期的衝撃を与えたこの劇は、教会で信者の手によって自作自演されている。演題は信者が聖書の中から撰んだもので、一番目は「アダムの堕落と贖罪の希望」、二番目「ソロモンに裁判を願った２人の女」と言うのであった。紙数がないのでここではソロモンの裁判だけに付いて述べておく。これは旧約聖書の列王記上第３章にある物語りで内容は大体次の通り。

ＡとＢの２人遊女が１つ家で生活していた。Ａが赤ン坊を産んで３日後にＢも産んだ。或る夜Ａの児が死んだのでＡはＢが抱いたまま眠っている児と自分の死んだ児とを取替えておいた。朝起きてＢは焼き死んだ赤ン坊はＡの児でＡが抱いている児が自分の児だと主張して争いとなり結局ソロモン王の裁判となった。王は生きている児を刀で両断し半身宛を２人に与えよと命じた。その時Ｂは「ああわが王よ、生きている児をＡに与えて下さい。決して殺さないで下さい」と嘆願した。これを聞いた王はこの女こそ本当の母親であると裁断したと言うのである。

ここまで書いて来ると読者の中にはハテこの話どこかで聞いた様だと思い当る仁もあることと思う。思い当るも同理これと同工異曲の裁判話「実母まま母の詮議」と言う大岡政談がある。赤ン坊を里親にやっていたところ里親の愛着が深くなり、自分が実母であると言い張って児を返してくれぬので大岡裁判となった。越守はその児を中に２人の親が両方から引張って勝った方に児を与えると言渡した。２人の親は両方から引張ったので児は火の付いた様に泣き出した。とたんに実母は思わず手を離した。奉行はその手を離した親こそ実母であると裁断を下した。

もうお気付きのことと思うが、この大岡政談はソロモンの裁判を日本風に焼き直した海賊版であると言うのが学者仲間の通説である。古くは内田魯庵あ笹川臨風あり、近くは木村毅がある。

因にこの劇が受けたので府内の教会では、その後のクリスマスや復活祭にこの種の宗教劇をやるならわしになったことを付記しておく。

大分県の演劇　昭和20年・30年代の

20年代の印象

30円の入場料

安達　昇

劇団「つみ木座」・アドバンス大分

昭和16年ごろだったと思う、今は故人になられた麻生建次の舞踊研究所が長浜神社の裏にあった。ここに同志が集まって国民演劇研究会というものを結成した。そして脚本朗読からけいこを始めた。乞われるままに知事公舎での部課長夫人の集いに出向いて脚本朗読会を開いたり、ある時は町内会の集会に出向いてこれをやった。しかし戦争がだんだん苛烈になってこれも続けられなくなった。

そして20年夏の終戦。21年春には再びこのメンバーが集まって脚本朗読ではあきたらず、実際に舞台に立って芝居をやろうという誓いを交わした。

大分演劇集団第１回公演はその５月別府公会堂で八木隆一郎作「湖の娘」でのろしをあげたのである。費用もかなりかかることだし…ということで遠慮しながらいただくことにしたた入場料が30円。

この時のプログラムの「演出後記」に衛藤吉之助はこう書いている「まるで奇蹟のように、あっという間に出来上がった。それがこの大分演劇集団である。いままでお互いの胸の中で内燃していた演劇への愛情が、なにかパッと火のように燃え熾って、融け合ってしまった…そんな感じである」

当時のメンバーにＮＨＫの長倉男士、西本美代子、大分合同新聞の佐藤太宥、山本益樹、姫野豊吉、故小松葉洲邦、岩丸利津子らがいた。

ともかく大成功に終わった旗上げ公演に、その後今の代議士佐藤文生、県の林業水産部長だった池永新三、現大分合同新聞専務長野弘らが一座に顔をつらねた。

その後10年間、別府公会堂、トキハ文化ホールで、赤い陣羽織、落日、教員組合、故郷の声、夜の訪問者などと真剣に取り組んできた。そして32年には「つみ木座」がこの後身として若い世代の人たちによって受け継がれ、昨年秋の「大友宗麟」＝中沢とおる＝となって実を結んだ。私はもう63歳。

心に残る三つの作品

堤　彦一

劇団「つみ木座」・県地方労働委員会

まずは、23年第１回青年演劇祭が開かれたときであった。当時の青年演劇は筌口成人さんのいた山香、大分市大道などが名をはせていたが、はじめて県下の代表が集ったこの大会で意外な伏兵が現われ、審査員をアッと言わせた。佐伯市の「お祭佐平」であった。断然群を抜き、その演出のスマートさ、全体に流れるハーモニーは観衆をうならせた。演出は山本宗生さん（現佐伯市文化会館）であり、これが縁で山本さんは県社会教育課の芸術担当者として赴任してきた。

つぎに高校演劇第１回県大会が別府市ナンバーワン劇場で開かれたときの、別府鶴見丘「鯨」の印象が強く残る。オニールの一幕物であるが、翻訳物とは感じさせない演出と演技のたのしさがあった。城達也、山岸みどりの高校レベルをこえた演技力はみものであった。演出は田村卓夫さん（現教育センター所長）で、田村さんもその後この演劇が奇縁でか上野丘高校から社会教育へと転任されてきた。

三つめは、第２回全国青年大会で１位である最優秀賞を受賞した鶴崎三佐青年団の「肖像」である。前年の第１回で山香青年団「路切小屋にて」が優秀賞をうけ大分県青年演劇が全国で高いレベルにあることを確認したのだが、第２回で最優秀賞をうけることにより全国での地位を確定した。岩津洋一郎さん（現在大阪）の創作で、30分以内という条件のなかでよくまとまったドラマであった。

この三つの作品が強く印象にのこるとともに、県下の演劇愛好者に与えた影響も大きかった。芸術に打倒という言葉はあてはまらないが、「お祭佐平」を「鯨」を追い越せが指標となった。商業演劇の地方公演がほとんどない当時は、県内で観覚できるもののなかでの最高峰であったと思う。

青年演劇

28年「肖像」が全国最優秀賞に

高橋壽満

県立日田林工高校長

終戦から３・４年間、言い知れない虚無感と方向を失なったような開放感の中で、憑かれたように若者たちは村や町で演芸会を催しては歌い踊った。

そのうちに、マドロスもの、やくざものの踊りに交って「父帰る」などの芝居も登場するようになった。復員者の中の演劇経験者が苦笑しながら手ほどきをしたもののようである。しかし、これは無駄ではなかった。24年に第１回大分県青年演劇祭が開催されるに至り、各町村から真面目な青年サークルが出場するまでになったのである。佐伯市青年団の山本宗生演出の「お祭佐平」はこの頃の青年演劇の中では群を抜いていた。

第１回全国青年大会は27年に発足し、今もつづいているように日本青年館で演劇が発表された。この年、山香町青年団は「踏み切り小屋にて」をひっさげて出場し優秀賞に輝いた。

第２回全国大会では、当時の鶴崎市青年団が岩津洋一郎の作、演出で「肖像」を上演し最優秀賞を獲得したのである。この後、全国的にオリジナル作品が数多く出たのはこの「肖像」が大きな刺激となったのである。

第３回全国青年大会で「明日を告げる鐘」が大分市滝尾青年団によって上演され、優秀賞を得たのであるが、この時、場内が興奮のるつぼと化し、劇作家の青江舜二郎をして「これこそが青年演劇である」と激賞させたのもオリジナルの強さであった。この作品の指導者は、最近精力的に地方演劇を盛り上げている中沢とおるである。青年演劇の基本を大切にした良き指導者と、凶作の中で終始青年たちを励ました住民の愛情と、その支援に応えた青年団の日常活動の合作であると今に伝えられている。

第４回全国青年大会は、大分市東大分青年団の「嵐の中」が出場したが、その迫力を絶讃されたが紙一重で入賞できなかった。この脚本の中に飛行場建設反対が織り込まれていたため大分市議会の問題になるなど、飛行場が移転した今となってはなつかしい想い出である。

この頃までが大分県青年演劇の質的に評価された時代であり、大野町「奔流」、犬飼町「あすなろ」、清川村「やまなみ」、竹田市「窓」等のサークルの灯も次第に小さくなっていくのである。

そして、その頃、農村には新らしい波がおしよせ、若者たちは都会に流れはじめた。※高橋氏は元県社会教育主事、文化係長であった。

[redacted]

高校演劇

豊泉荘で徹夜の合同批評会

尾登一信

県立別府青山高校教頭

戦争が終った。すべてが混乱の極の中で、新制高校が発足した。あらゆることに目的を失っていたその頃、各学校で自然発生的におこったのが演劇活動であった。地域の青年たちがその情熱を「やくざ芝居」に注いだところから始まった青年演劇と対比される高校演劇は、疎開や引揚げによる異質な文化の流入とともに、生徒と同次元で探求し、何かを創造せねばおれなかった教師が、いわゆる座付の指導者として存在したところに特色がある。

各学校での発生の態様はさまざまだったであろう。それが一つにまとまって発展の方向を指向したのは、高校演劇のコンクールと、それに引続く高文連の発足であった。さしあたってのお膳立ては高教組がしてくれた。昭和23年から始まった高校演劇コンクールの第１回、第２回は別府のナンバーワン劇場であったと思う。（今、テレビ塔のある所）そこにはホリゾントというものがあった。照明をあてれば夕焼が映え、星が輝やく。田舎者の私などはただただ驚きであった。審査員の偉い先生方には寄りつき難く、大分合同新聞の批評を読んでは憤慨したり、喜んだりした。小松葉州邦・佐藤太宥・池永慎三・山本宗生、みな大分県の高校演劇をはじめて育て、鞭うってくれた方々である。

然し、何しろ何をやっていいかわからない時代である。無闇ヤタラとむつかしい作品に取組んだり、大げさな装置をつくってみたり、ただただ情熱のおもむくままであった。又、コンクール形式の弊害がてきめんに現われ、競争のための競争で、相手から学ぶというところが全くなかった。その弊を改めたのが中央演劇祭形式への脱皮と高文連の発足であり、高文連の中核としての演劇部活動における講習会の成功であった。

高文連の結成は伴了三先生、津野任先生等が産婆役になり、高文連主催としてはじめての中央演劇祭が昭和26年別府市中央公民館で行なわれた。その時はじめて創作劇が登場し、別府緑丘高の「風鈴館の人々」（堀賢二先生作）、中津北高の「けれども行く」（中津北高演劇部作）の２作が話題になった。豊泉荘で夜を徹して行なわれた合同批評会。巨体をソファーに沈めて徹夜の司会をやりぬいた津野任先生のお姿は、尊いものがあった。

中央演劇祭は延々と続いて今年で27回、講習会は22回、高校演劇の組織は九州・全国と拡大して、私などが口を出す余地のない程大きなものになってしまった。

※尾登氏は当時第二代の高文連演劇部長をしていた。

[redacted]

児童演劇

あの時の純粋な運動をもう一度

園田喜平

県芸振会顧理事・童話作家

戦時中の統制された生活から解きはなされると児童文化活動も活発になってきた。その中心となったのは大分県童話協会（会長藤野新）であり児童文化連盟の活動であった。児童文化連盟は首藤貞美が首唱して童話協会の構成員がほとんどを占めていた。１・２年してその活動も低調になると童話協会が活発に活動し始めた。渡辺克己、古林茂三郎、安東延由等の人々も童協に加盟した。

満州から引き揚げて来た篠田正が童協に複帰して彼の持つ人形劇の技術を伝え、人形劇団「どんぐり座」を結成し県内はもちろん広く宮崎県まで行ってその技術を伝えた。県内の児童達は人形劇に魅惑されてしまった。大分合同新聞はその頃人形劇コンクールを開いてその普及に協力した。

学校劇については当時私が学校劇研究の中心となり、市内学校の教師を会員として「大分市学校劇研究会」を結成した。元の労働会館のホールを借りて、市内小中学校の生徒による学校劇発表会を開いた。その頃新しい教育過程が文部省から発表された。その中に書かれた「劇化」という言葉は千回以上に及んでいた。これは学校劇振興の背景でもあった。学校の要求に応じて童協は「大分県学校劇研究会」を毎年恒例行事として開き、中央からベテランの内山嘉吉や栗原一登氏等を招いた。この研究会は10数年に及んだ。学校劇研究から発展して児童劇団を結成したのは私で劇団「次郎」と称して活動した。

児童憲章が公布されると県童話協会、大分合同新聞、県の三者が一体となって童話の国と銘うった童話グループを結成し広報車で県内を巡回して、児童文化の普及に務めた。昭和26年頃ＮＨＫ大分放送局放送部長として太田三郎氏が赴任して来た。この部長は東京で放送劇を研究した人で大分に児童劇団をつくる準備をした。委託を受けたのが私で私は大道小学校の子供をつかって大分放送児童劇団を結成した。放送劇を普及させるため大分放送局は放送劇コンクールを開いた。このコンクールは10年余り続いた。放送劇の普及は言葉の修練に大いに役立った。このような県中央の動きに応じて地方にも又組織的に研究団体がたくさん出来た。

振り返ると、昭和20年代は児童文化運動がほうはいとして盛り上った時であった。それは敗戦の荒廃から児童を守ろうとする人々の純粋な、やむにやまれぬ動きであったが30年代になるとラジオ・テレビなどマスコミの商業主義に押されて、その動きは影をひそめていったのである。昭和50年の現在、あの時の純粋な児童文化運動をもう一度取戻し、児童演劇の新しい台頭を私は願い続けているのだが……。

あすなろ

走馬燈の絵図

渡辺泰三

劇団「あすなろ」主宰・犬飼町民文化会議事務局長

過ぎて迎えた15年、青年演劇サークル「あすなろ」も社会情勢の変化、とりわけマスコミの大洪水に流され、すっかり色あせてしまった。だが走馬燈の絵図となれば数限りなくある。昭和35年５月、当時の町青年団活動の中から産声をあげ、数少ない青年達に守られて来た。昭和38年５月町民文化会議を結成、同年11月記念行事として第６回県民演劇祭を町中央公民館で開催した時の忘れられない思い出。プログラムの広告とりに佐土原武雄氏（現町社教主事）と共に秋雨煙る夜の上野墓地公園での事、道不案内で迷い込んだのだった。暗闇にボーッと浮び上がった濡れた墓標、突然目の前に老人が灯りを手に現れた。ふるえ上った２人、墓標かきわけ１目散。費用ねん出に必死だった。やっとの思いで目的の病院へ。今度は犬のお出迎え、猛烈な奴だった。応待に出てくれた院長夫人の顔、菩薩様に見えた程だった。ずぶぬれで頂いた２千円、紹介してくれた先生がよかったが当時としては大金だった。町内商店街も全戸の広告を集め照明器具購入資金までひねり出した。今思えば若くもあったが意気盛んな時代であった。町民文化の振興、社会教育の一端となった「あすなろ」は幅広い層を集め多様化していったのである。或る時は合唱団を、或る時は他町の老人ホーム慰問へ、或る時は婦人会の母の日に、と。大分市に文化会館を建設する機運が盛り上がったのもこの頃だった。建設期成会に廃品回収作業をして貧者の一燈を送っている。40年「戦国百姓記」を県青年大会へ（於日出町）、37年「普通列車」（於佐賀関町）に続いて２度目の最優秀賞。次いで県民演劇祭（於労働福祉会館）町民文化祭と「あすなろ」の全盛期でもあった。町内で演劇と言えば「あすなろ」、「あすなろ」と言えばお芝居と言われる迄に成長したのであった。41年大分市に文化会館が完成した。翌42年県民演劇祭の成果から大分市に演劇観賞団体（大分労演）の組織化に「あすなろ」ぐるみ参加した。町民の演劇観賞運動として今日迄続いているが、観賞する側から創造する側への若い世代の呼びかけを続けている。絶えず総人口５・600の１パーセントを目標に例会に参加している。民芸の「もう一人の人」の時は78名で大型バスを貸切って観劇した思い出も新しい。44年オリジナル「出稼ぎの歌」を県青年大会へ、３度目の最優秀賞で全国青年大会へ（於神田一橋講堂）。

結成当初の青年は今や壮年である。若い世代との価値観の相違がひどくなり、物事を感覚的に捉え、身をもって苦しまない安直な姿勢が強く加えて仲間意識も弱くなり、サークルを否定する様な世代が育って来ている。過去上演した作品17本、内オリジナル７本、郷里の民話を

37年12月9日の県民演劇祭

大分県教育会館三階ホールで多数の演劇ファンを迎えて5劇団が熱演した。写真は「乞食のうた」大飼町"あすなろ"の演劇の一場面。

写真は大分合同新聞社提供

をテーマにあすなろ共同劇場を企画しているが果して若い世代に受け入れられるか疑問である。社会教育の欠陥の現われであろうか。ナンセンスドラマはテレビで沢山だ。イヤな時代になっている。[redacted]

豆知識

○演劇の本質

演劇はまず何よりも、生身の人間を材料とする。絵画におけるカンバスと絵の具、文学におけることばや文字に相当するものは、演劇では俳優の肉体そのもので、したがって絵や文学や彫刻などとちがい、瞬間的につくられ、永久に消え去っていく。その点音楽に似ている。また、人間がつくる点では舞踊と同じだが、舞踊はかならずしも劇的な筋をもたなくてもよい。しかし、どんな短いものでも、演劇には出発点があり、それが時間とともに発展してやがて終局にいたる。人間をテーマにしたひとつながりの劇的な行為がえがかれなくてはならない。「劇」という字は「虎」と「豕」(いのしし)と刃物を示す「刂」の合成で、たけだけしい対立者が相戦う様を意味す。人間と他の何ものか—運命・神・境遇・社会悪・ほかの人間・人間自体にひそむ、相反する性情など——との矛盾・対立がしだいに表面に現われ、互いに戦いながらつぎつぎに行為（アクション）を生んでいき、一つの結末にいたる過程、それが劇的行為である。そして、その原型がすなわち上演台本、ドラマ（劇曲）である。それはかならずしも文字で書かれることを必要としないが、原始的、即興的なものから高度の演劇に分化・発達するうちに文字で定着されるようになり、戯曲は文学の一種ともなった。当然、戯曲は俳優により行為され、現在眼前で進行しつつあるかたちで、つまり人物の出し入れ、場面状況、動きの設定などを補足しながらも、あくまで台詞（せりふ）を主体として書かれる。他の文学とのちがいもここにある。

○演劇の三要素

俳優と戯曲（要するに劇的行為）と観客を演劇の三要素という。演劇のおこなわれる場としての劇場の存在はもとより必要で、これを加して四要素としてもよい。俳優と戯曲の必要なのは前に述べたとおりだが、観客もまた不可欠である。

観客は舞台が良ければ感動を表明し、悪ければ不満を示す。その反応の波動はただちに舞台に及び、劇の成果を左右する。つまり、観客はたんなる鑑賞者ではなく、積極的に演劇創造に参加するものだといえる。この直接的な交流共感は、そもそも俳優と観客が根元的には一体であることによるもので、他の芸術との大きなちがいでもあり、機械による再生芸術である映画・テレビなどとも本質的に異なる点である。

つみ木座

はじめの5年間

佐藤至良

劇団「つみ木座」演出・県立大分商高校教諭

1957年、多幕物をやれる劇団を大分につくろうと言うことで出来たのが「つみ木座」だった。メンバーは青年団、聴場、高校などの演劇関係者で、「夜の来訪者」「しばてん物語」の2本の芝居作りに取り組んだが、いろいろな問題に突き当って苦労した。特に皆、他に仕事を持っていて、余暇に芝居をつくろうというのだから、全員揃って練習する事は難しく、呼吸の合ったアンサンブルがなかなか生まれなかったが、この様な素余劇団の宿命的な困難はその後も「つみ木座」につきまとった。しかし、とにかく当時これは画期的な試みだったので、まわりの関心が高く、練習会場、その他いろいろな面でその後の「つみ木座」に比べれば、ずいぶん恵まれていた。この年、良い映画や演劇をみようと言う事で映画演劇協議会が発足し、その初回例会に「つみ木座」公演がとりあげられ、華々しいスタートを切った。

けれども初回の公演が終わって、ほっとした所で集まりが悪くなった。放っておけば「つみ木座」はなくなってしまう。次の年、木下順二の「赤い陣羽織」をとりあげ、私が演出を担当したが、人が集まらず練習は困難を極めた。四苦八苦して公演までもって行ったが、それからは活動不能におち入った。

その頃、荷揚小学校の東側、今の消防署の向い側に木造2階建ての小さな家があった。これを文化会館と称して市内のいくつかのサークルが利用していた。つみ木座集会日の木曜にそこに来るのは私と木本ひでよさんの2人だけの日が1年以上続いた。夏は蚊が多い。腕や足にとまって血を吸う奴をピシャピシャ叩きながら窓から駅方面のネオンを眺めて時間を過すのはわびしい限りだった。冬は火の気のない部屋はよく冷えた。とにかく集会日にそこに居なければ誰かたずねて来たとき困るだろう。なかば意地になって出続けた。つみ木座とのかかわり合いは創立以来、現在まで続いているが、私にとってはこの時期が一番印象深い。

1960年頃、阿部英二郎君が帰って来た。彼は私が大商演劇部に関係した頃の部員で、東京に就職し、麦の会で演劇活動を続けていた。彼を「つみ木座」にひき込み、大商演劇部卒業生に声をかけ、チェホフの「結婚申込」を公演した。このメンバーに同じく高校演劇出身の日名子信行、菊入亮吉、高橋護の諸氏が加わり、次々に若い力を注入して、宮本研作「はだしの青春」に取り組んだ。こうして創立時のメンバーが一新され、「つみ木座」は息を吹き返した。その後の活動は人々にも知られている。

戦後、多くのサークルが誕生したが、その出発は華々しくても、その後に訪れる苦難の時期をしのげず、大部分は消滅した。現在、20年以上の歴史を持つサークルは大分市内では絵画の「新世紀群」と、この「つみ木座」だけだろう。[redacted]

つみ木座の上演記録

	(作者)	(題　名)	(演出者)
昭和32・5		「しばてん物語」	中沢とおる
〃	内村直也	「夜の来訪者」	岩津洋一郎
32・12	木下順二	「赤い陣羽織」	佐藤　至良
33・6		「そら豆の煮えるまで」	
35・12	チェーホフ	「結婚申込」	
36・2	宮本　研	「はだしの青春」	佐藤　至良
36・12	八木隆一郎	「姉の言葉」	〃
37・4	〃	「姉の言葉」	〃
37・12	宮本　研	「人を食った話」	池永　潤吉
〃	真船　豊	「寒　鴨」	吉井久雄
38・3	宮本　研	「人を食った話」	池永　潤吉
38・11	宮本　研	「五　月」	〃
39・4	伊賀山昌三	「結婚の申込」	阿部英二郎
39・11	木下順二	「三年寝太郎」	〃
40・4	〃	「二十二夜待ち」	池永　閏吉
40・11	〃	「瓜子姫とアマンジャク」	日名子信行
41・9	早船ちよ	「キューポラのある街」	池永　閏吉
42・5	鈴木力衛	「ピエール・パトラン先生」	阿部英二郎
42・11	宮本　研	「五　月」	菊入　亮吉
43・7	八木柊一郎	「三人の盗賊」	松本　芳美
45・6	宮本　研	「はだしの青春」	阿部英二郎
〃	伊藤真助	「消えたパークシャ」	日名子信行
46・9	木下順二	「夕鶴鶴」	〃
47・7	八木柊一郎	「空　巣」	〃
48・4	伊賀山昌三	「結婚の申込」	阿部英二郎
48・11	中沢とおる	「沈んだ島の物語」	中沢とおる
49・5	宮本　研	「人を食った話」	阿部英二郎
49・6	ロバート・ボルト	「花咲くチェリー」	佐藤　至良

内科・小児科

近藤内科

大分市金池南2丁目11－28上野丘中学前
TEL ㊸ 9553

なにかがやれる瞳

中　沢　とおる

劇作家・大分市判田中教諭

爆弾で舞鶴町（大分市）にあった家が丸焼になったおかげで、軍隊から帰った私は戦後の４年を国東町で過した。日本の主要都市の大部分が爆撃で焼野ヶ原になっていた時代である。

砂漠で泉を求めるように、心のオアシスを求めて人々は日本中のすべてのふる里で歌い、踊り、お芝居をした。生きていることを確かめ、明日に生きる道を探るキラキラと輝やく瞳がその歌と踊りと芝居のなかにあった。

私は国東の青年たちから奨められて、青年たちと一緒に「十字路」という終戦を扱かったお芝居をつくった。国東の代表として大分市でおこなわれた〝大分県職場演劇、青年演劇コンクール（２日間昼夜とおし、映画館を借りきって）に招かれ賞をもらった。全県演劇の仲間と始めて交流した私の記念すべき年である。23年であったと思う。

大分市はすすんでいた。焼土になった街の真ン中にぽつんと無惨な形で焼残った金池小の講堂に、前進座がシェイクスピア劇をひっさげて東京からやって来、食べるものもないあの時代に、延々と入場を待つ長蛇の列が続いた。〝お芝居とは創ることと、観ることを含めてこんなにも人間にとって素晴しいものか〟ということをあの時心に刻まれたものである。

復興がすすむのにあわせ、民劇や俳優座などの劇団もくるようになり、私たちの創るささやかなお芝居も、職場演劇、青年演劇ともに黄金期を迎えた。県下の主要な労働組合はみんなガツチリした文化部をもち演劇部ももって、１年に１度は素晴しい演劇コンクールを市民に公開したものである。青年演劇は文部省主催でいまでも東京で全国コンクールがおこなわれているが、28、29、30年と３年連続して大分がトップの賞をとり全国から注目された。岩津洋一郎、筌口成人と私の３人のオリジナル作品であった。

力の分散を惜しんで有志が呼かけあい〝つみ木座〟を結成したのが32年５月である。岩津が「夜の来訪者」私が「しばてん物語」を演出し、初演を飾った。トキハ文化ホールが満席であった。地方で働きながら自立劇団を結成したのは珍しく、九州でも数少ない一つであったと思う。

この２・３年のちから沈滞と衰退が始まる。全国的な現象として職場演劇が影をひそめ、農村の過疎が青年演劇を崩していった。地方演劇活動は30年代の後半から40年代前半にかけて暗い一つの谷間をとおる。

〝つみ木〟を背負う人々も新しい人々に変った。そしていま新しい復興期が来たように思える。始めて手を握るある頃の人も、いまの若い人も、私が終戦直後にみたキラキラ輝やく瞳をもっている。なにかがやれるという期待感で胸がふくらむ今日この頃である。

[redacted]

ことしの県民演劇は「邪馬台国」で＝中沢氏の創作

県民演劇の第二作として話題を集めている中沢とおる氏の台本「邪馬台国」のあらすじが、このほど新聞に発表された。題は「宇佐邪馬台国―女王卑弥呼」で、２幕20場、公演時間は２時間半、登場人物は延べ 780人という大作もの。

日本古代史の謎として有名な邪馬台国が大和説、九州説と論議で沸騰している中で、特に最近は九州の中でも宇佐説に視点が集中してきたことは、県民にとって大きな関心事といえる。

こうした時、県民演劇の第二作として「宇佐邪馬台国―女王卑弥呼」が、50年度の県芸術祭行事として華々しく公演されるならば、又しても大センセーションを巻きおこすのではないかと、関係者は大きな期待をもってみている。

第10回県芸術祭の「大友宗麟」

昨年秋の第10回芸術祭の県民演劇「大友宗麟」は中沢とおる氏の創作と演出によって大成功をおさめた。県内の演劇サークルの関係者はこの公演をどうみたか、10人の方々へアンケートを求めたが、次の２人から回答があった。

すばらしいことだと思います。県下の同好の志たちにとって、より励ましになりました。事情やむをえずテレビでしか観劇できませんでしたが、斬新、かつ簡潔な舞台、それを縦横に駆使する演出と登場人物。

中沢先生から「テレビでなく本舞台を観なくて」とおききしまして、それでなくとも切歯扼腕の小生、残念の極であります。再演を望むこと切。

歯ぎれのよい、はやり場面転換も、めりはりのきいたセリフもいまの感覚にぴったりでした。

県下にはたくさんのサークルや同好の志がほそぼそと心もとなくあゆみ続けています。ぜひとも連絡の会をつくってほしいです。

（菅沢活水・[redacted]・劇団「みずぐるま」顧問）

鹿児島県巡演中で、観劇できなかったのが残念です。新聞によると、大成功だったとのこと、何よりもおめでとうございます。

元来大分の演劇界は永い伝統を持ち、優れた方々が大勢おられるのですから、力が集まれば、すばらしい演劇を創り出すことはできるものと思っていました。一昨年の「沈んだ島」に続いての大成功が嬉しいし、今年また何ができるか楽しみにしております。

（野呂祐吉・〒875－02 大野郡野津町・「造形劇場」）

県民オペラ「吉四六昇天」の東京公演が終わって各紙はいろいろな反響を報道しているが、ほとんどが専門家の声や専門誌の評論などである。

1月26日の新宿郵便貯金ホールに入場した〝一般観衆はどう見たか〟、東京在住の鑑賞者の声を聞いてみた。(「芸振」編集係では入場者に無差別30枚のアンケート用紙を送った。わずかではあるが次の方々からご返事を受けたので受信順に掲載する)

アンケート 吉四六昇天 東京公演をみて

一回だけの公演が残念

星野宏子(東京都出身)

今回の県民オペラ、本当にすばらしいものでした。考えていた以上のできにびっくりしました。二・三あとで話に出たのですが、幕あいの切絵ですが、すばらしいのですが暗すぎたことと、何らかの説明が入った方がよかった気がいたしました。それと、最後の方でユウレイがマイクを使っていたようなのが残念でした。吉四六さんとの距離感がありませんでした。

東京生まれの娘にはことばが分からなかった様ですが、全体を通してちゃんと意味は理解できたそうです。

今後とも、この様なすだらしい発展をお祈りいたします。一回の公演が何とも残念！と声をたくさん聞きました。(〒194 東京都町田市木[redacted] ピアノ教師)

親しまれるオペラ

佐藤和子(香川県出身)

過日は　東京公演の幕を盛大に上げられ、お喜び申しあげます。たくさんの大分県人の方々の中で、多少よそ者の気分を味わいながら拝見させていただきました。オペラそのものできばえは素人の方々がおやりになるのですから学芸会的ふん囲気であるのも仕方がないと思いますが、想像していたよりはるかにお上手でした。大分県の民話から題材を取られ、だれにも親しまれるオペラを創りあげ、一般大衆に近づく努力をされたことを変結構だと思います。ぜひ今度は芸術的かおり高いオペラを満都に響かせてください。

(〒190 東京都立川市[redacted]・団体職員)

大分文化のにおいを発散

荒金幸子(別府市出身)

戦後「あんなあ一吉四六さんがなあ」と次々に話してくれたのは、大野郡川登村の六年生の子どもたちでした。新卒で赴任した私は初めてきく話なので、ゲラゲラ笑いころげて聞いたものでした時々この東京の子どもたちにも話してあげています。その吉四六さんのオペラですもの、楽しみにしていました。

ところが、熱演にもかかわらず聞きとりにくいところがあって、やっている人に申しわけない様な音響効果の少々悪い会場でしたが、しかし、何とすばらしい県民オペラでしょう。全般に大分の文化のにおいを発散……こちらの人を二人おさそいしましたが「大したものですね」とその方も申されていました。方言でわからないながらも感激して吉四六さんの本を買って帰られました。中二まで大分市にいました弟も改めて大分を見直したようでした。

吉四六さんの心は大分県民の心。立川さんはよくそれを表現してくださいました。合唱団で少しの間いっしょに歌ったことのある立川さん、伊勢さんの姿もなつかしく、大分にでもいったような楽しい一日でした。(〒19401　東京都町田市鶴川[redacted]小学校教諭)

ステージと観客が一つになって

加藤　翠(大分市出身)

先日は待望の県民オペラを鑑賞させていただきとても楽しいひとときを過させていただきました。団員の方々のすばらしい声、子どもの頃の懐しい方言と民話の世界へ心をうばわれてしまいました。ステージと観客席が一つになり、笑いのうずの中で私はもちろん、みなさんが郷愁にかられていらしたのではないでしょうか。幼き時の友の出演、東京のテレビ、新聞で好評を見、聞きするたびに、とても私共までうれしくなってしまいました。

一部切り絵の時に少々不鮮明だったのか残念なようにも思います。今後のすばらしい公演を期待してご成功をお祈りいたします。

(〒350－13　埼玉県狭山市[redacted]主婦)

オペラに取り組む熱情

井上康子(東京都出身)

このたびは、立派な県民オペラを見せていただき、ありがとうございました。

両親は大分出身ですが、私は東京生まれですので、大分の方言はわかりませんが、演技が上手なので理解できました。

民話もオペラにすると大変面白く、その地方のいろいろなことがよくわかり、いいことだとつくづく感じました。

団員の皆さんが一生懸命に県民オペラに取り組んでいる姿が手にとるようによくわかりました。これからもいいオペラを東京の人に見せてください。(〒190　東京都立川市[redacted]・大学生)

ニュース

昭和50年度の文化庁青少年芸術劇場・こども芸術劇場・移動芸術祭巡回公演ならびに九州・沖縄芸術祭の公演種目と期日等が次のように決定しました。

1.青少年芸術劇場

◦8月7日（木）津久見市民会館、能・狂言、能は喜多流「黒塚」狂言は大蔵流「神鳴」「棒縛」

2.こども芸術劇場

◦8月26日（火）別府国際観光会館、劇団四季による音楽劇ケストナー原作「ふたりのロッテ」

3.移動芸術祭

◦10月30日（木）佐伯文化会館、東京フィルハーモニー交響楽団による交響楽演奏会。

◦11月15日（土）津久見市民会館、劇団四季によるミュージカル、シェークスピア作「ヴェローナの恋人たち」

4.九州・沖縄芸術祭

◦九州オペラフェスティバル、7月7日（月）大分文化会館にて鹿児島オペラ協会による「ヘンゼルとグレーテル」トリオ演奏会、7月12日、佐伯文化会館にて、ピアノ中村紘子、バイオリン海野義雄、チェロ堤剛による演奏会。

◦フランス音楽の夕べ、9月14日（日）別府国際観光会館にて、ピアノ伴奏中村洋子、歌曲立木稠子。

◦グラフィックデザイン展　10月4日～10月10日まで大分市府内会館。

◦県立博物館の建設場所はどこ？

博物館を大分、別府両市が誘致運動を展開して県議会へ請願書をそれぞれ提出していたが、現議員の任期切れに伴い審議未了として結論が出なかった。したがって両市が今後も誘致請願をしようと思えば、選挙で新しく選ばれた議員によって6月県議会に改めて請願を提出しなければならない。

◦県立芸短大が大分市へ

芸短大はこの4月から大分市上野の元大分大学経済学部跡へ移転する。大変立派な学舎で芸術の殿堂が大分市にまた一つ、この際、国立大4年制に昇格運動しては――の声もある。

◦福田平八郎画伯の絵がかえってくる。

終戦時、大連の在留邦人を救うため、数多くのコレクションと共にソ連軍に渡した、福田先生の作品62点の中から43点が日本政府に寄贈される。この運動のもと起しは大分県であり県芸振会議の当時事務局次長であった北村宏道氏であった。寄贈された作品は国立京都近代美術館に保管されるということである。

「郷土の先覚者シリーズ」第5号刊行のお知らせ

すでに新聞等でご存知のことと思いますが「郷土の先覚者シリーズ」第5集「前野良沢」(執筆者順天堂大学教授小川鼎三先生)「朝倉文夫」(執筆者県教育センター所長田村卓夫先生）が刊行の運びに至りました。若干余部がございますので教育庁文化課文化係（36－1111内線378）までお申込いただければ1部 250円（送料別）で頒布いたします。

消　息　　県芸振本年度加盟団体名

団　体　名	代表者名	事務局長名	事務局所在地	会員数	設立年月
都山流尺八楽会大分県支部	遠藤楠山	伊藤慎山	大分市都町3 6－12	74人	昭和40年3月
大分邦楽研究会	三浦敬子	三浦敬子	大分市府内町3丁目5－28	130人	昭和32年

〔お願い〕

昭和49年度会費の納入について

49年度も残すところ後わずかとなりました。団体会員個人会員で会費未納の方は、至急納入くださるよう紙上を借りてお願い致します。振替用紙入用の方は文化課文化係（36－1111　内線 378）までご連絡頂きましたら早速ご送付申し上げます。　（K）

豆知識

○俳優

戯曲中の人物に扮して演技する者で、演劇のもっとも本質的な要素である。わが国では古く「古事記」「日本書記」の海彦山彦の伝説のなかにすでにこの二字がみえるように、古くから俳優は存在したが、東西ともこれが完全に専業化したのは中世の末から近世のはじめにかけて、職業的劇団が確立してからといってよい。今日の新劇のように、男役は男、女役は女が演ずるのが本来自然であるが、ギリシア劇、エリザベス時代のシェークスピア劇、能・狂言・歌舞伎など、時代・社会・形態に応じて、男優だけで演じた場合も少なくなく、ぎゃくに女優ばかりの劇団（少女歌舞伎・少女歌劇）もある。一般に社会的地位は低く、役者は河原者として蔑視されていたが、近代以後は芸術家として遇せられるにいたり、演劇における俳優術も体系づけられるようになった。そして映画俳優、ラジオの俳優（声優）からテレビ俳優など、俳優もいろいろに分化し、相互の交流もおこなわれている。歌舞伎や新派で女役をする男優は、女方俳優（女形おやま）とよばれ、独自の習練を要求されている。

あの頃の文化団体

――21年前のこと――

大分市文化団体名薄（昭和29年９月現在）順不同

大分市教育委員会社会教育課調査

団体名	性格	事務所	責任者	備考
大分市芸能文化協会	芸能文化団体の連絡・研究・発表	中央公民館	会長 上田 保 事務 藤野 新	昭和28年８月結成 13団体加盟
大分市音楽協会	洋楽関係団体を１本にまとめたもの	碩田中学校	会長 千本延隆 副会長(事務)久末知(碩中)	芸協加盟28．7 以下11団体加盟
大分地方裁判所合唱団	合唱団	荷揭町24 大分地方裁判所	矢野典生	28．2　20名
九州電力合唱団	合唱団	金池町 九州電力株式会社	門上恵蔵	28．3　20名
大分電電タンゴ・アンサンブル	タンゴバンド	中島８条　大分電報局	通信課　荒木富夫	28．8　7名
大分県庁職員組合ブラスバンド	ブラスバンド	荷揭町 大分県庁職員組合	堤省三	23　10名
大分県庁職員組合合唱団	合唱団	荷揭町 大分県庁職員組合	首藤宗徳	28．　30名
国鉄協調楽団	管弦楽	金池町 鉄道管理局総務課	榊久雄	15名
南大分合唱団	合唱団	南大分田中	三浦義正	21．　22名
県教組ブラスバンド	ブラスバンド	上野ヶ丘中学校	長野守	26．　16名
音楽協会合唱団	職場以外合唱同好会	碩田中学校	久末知	28．7　25名
東大分合唱団	合唱団	萩原東	芦原シゲ子	30名
みどり合唱団	電報・電話局員による合唱団	中島８条　電報局	倉本功（通信課 久野武彦（庶務課）	28．8　50名
白鳩合唱団	合唱団	県立図書館内	松尾則男	29．6　85名
大分市洋舞の会	市内舞踊研究所の連絡会	中島10条	平瀬克美	芸協加盟28.7　３団体
ゆりかご舞踊研究所	児童洋舞踊研究	中島10条	平瀬克美	市洋舞の会加盟 23年頃　50名
てるぶ舞踊研究所	児童洋舞踊研究	大分大学学芸学部	見岳千恵子	市洋舞の会加盟　50名
安部峰子舞踊研究所	児童洋舞踊研究	小物座町	安部峰子	市洋舞の会加盟　40名
大分県三曲協会	県内琴・三弦・尺八関係者の会	東新町	会長 藤本柳山	芸協加盟　58名
大分清元会	市内清元関係者の会	西新町	会長 奥川元市	芸協加盟 20年頃 15名
柳会	市内小唄の会	京町	会長 小倉谷策	芸協加盟　40名
大分市長唄協会	市内長唄関係者の会	竹町南通	代表 矢野健一郎	芸協加盟　28．7
大分市日本舞踊連盟	市内日本舞踊団体の連絡会	白銀町	会長 藤間小伊松	28．8　15名
大分宝生会	謡曲・宝生流の会	市役所４階　保健組合	甲斐直	芸協加盟 22年秋 50名
謡曲・喜多流会	謡曲・喜多流の会	荷揭町　知事公舎	細田芙美子	芸協加盟
観世流　吉川同門会	謡曲・観世の会	荷揭町	吉川周子	芸協加盟
近松会	義大夫の会	京町	小倉谷策	芸協加盟
小兼会	常盤津の会	勢家本町	小野キン	芸協加盟　27.7　20名
朋精会	観世謡曲の会	若松通	藤沢頼雄	芸協加盟
大分放送劇団	放送劇団	生石大分放送局	笠口成人	24．4　20名
大分放送児童劇団	児童放送劇団	生石大分放送局	日下修	28．8　23名
大分放送合唱団	合唱団	生石大分放送局	今吉煌	23．4　27名
大分放送軽音楽団	軽音楽	生石大分放送局	江良浩	24．8　7名
大分放送管弦楽団	管弦楽	生石大分放送局	清水二彦	24．8　14名
ＩＰ友の会	放送研究レクリエーション	中央通　十字堂	高橋賢	28．6　14名

ラジオ大分放送合唱団	合唱団	高松 ラジオ大分	滝本利一郎	28. 12 25名
ラジオ大分放送劇団	放送劇	高松 ラジオ大分	板井正男	28. 12 35名
大分県童話協会	児童文化一般	荷揚町 電話交換局前	園田喜平	31. 7 70名
映画サークル	映画・演劇研究	西新町3丁目	首藤宗徳	
舞台効果集団	舞台装置・効果研究	荷揚町 大分合同新聞社	是永勉	29. 7 20名
大分漫画集団	漫画研究	荷揚町大分合同新聞社	安東延由	24. 20名
大分県美術協会	絵画研究団体	荷揚町 キムラヤ	会長 権藤種男	
スバル	絵画研究団体	長浜町南11	広瀬通秀	県美協加盟 8名
新世紀群	絵画研究団体	荷揚町 キムラヤ	木村成敏	県美協加盟 10名
かんな	絵画研究団体 大学卒業生グループ	王子町	広瀬晴四郎	県美協加盟
チャーチル会	絵画研究団体	県庁内 県観光協会事務所	堤恒造	県美協加盟 12名
八果会	絵画研究団体	王子町 大分大学学芸学部	浜田九一郎	県美協加盟 8名
豊池会	書道研究	北太平寺	平田寿	昭和4年 500名
わかな会	書道研究	本町7丁目	安部伸平	50名
大分光画会	写真研究	京町	矢野四郎	120名
大分市 大分県 華道協会	華道研究	大工町	津崎鏡	24. 4 各100名
東九州文学	創作研究	本町 藤宮方	園田仁	29. 1 20名
石	俳句の会	生石 657の1	田原千暉	26. 30名
心象	詩の会	春日町	首藤三郎	22. 12名
大分番傘川柳会	川柳研究	舞鶴町県営住宅 長見 静方	織部天晴	7. 7 10名
川柳大分	川柳研究	大分港	島根和星	28. 7 12名
虹波	口語俳句	荷揚町	津田露色	21. 4 25名
大分市文化財保存会	文化財研究保存	金池町 中央公民館	矢野孝吉	27. 2 30名
大分市石仏保存顕彰会	石仏保存顕彰	上野北 立川輝信方	上田保	28. 4 16名
大分市フォークダンスクラブ	フォークダンス研究	大分市教育庁	田所正義	27. 12 160名
大分市視聴覚文化研究A・V・C	視聴覚文化研究	中央通り 大分映画株式会社内	首藤貞美	29. 1 20名
大分映画サークル	映画研究	西新町3丁目 大分映画サークル	首藤宗徳	
大分県高等学校教職員組合文化部	教育文化一般	荷揚町 教育会館	部長 伴了三	県教組加入 組合員 1,300名
大分県教職員組合文化部	教育文化一般	荷揚町 教育会館	部長 伊瀬礼之介	組合員 7,939名
大分市教組文化部	教育文化一般	大分市金池小学校	部長 野中悟	県教組加入 組合員 560名
大分県職員組合文化部	一般文化研究事業実施	県庁薬務課	部長 藤沢了一	組合員 3,000名
県教育庁文化部	〃	県教育庁総務調査課	部長 武田琢也	組合員 220名
国鉄労組文化部	〃	新大道町	部長 大野勇	組合員 3,300名
富士紡労組文化部	〃	生石	部長 森山幸次郎	組合員 800名
全運従組大分地区文化部	〃	中央通	部長 佐藤文男	組合員 3,300名
大分バス労組文化部	〃	西町	部長 生駒筲樹	組合員 322名
大分県貨物運輸従組文化部	〃	金池町	部長 宇野英敏	組合員 504名
県立病院文化部	〃	西新町県立病院	総婦長 小花一子	
大分銀行従組文化部	〃	中央通	かわせ課 上田学	組合員 1,160名
大分市連合青年団	〃	生石	団長 橋本弘 文化部長 首藤義正	
大分県婦人団体連合会		荷揚町	理事長 吉川周子	会員 748名
友の会	生活の合理化研究	東新町	溝口操子	昭和4年 60名

※この団体は大分市の団体だけでなく県単位のものや、事務局が大分市にあるためこの名簿に入っているものも多い。

波紋

文化運動即大作主義？

劇団「糸車」主宰
日田文化連絡会事務局　中津留　鉄男

昨年の暮ちかく、宮崎県の「劇団とろあ」より、九州内の各自立劇団の連絡を密にするため、公演毎に情報交換ができる組織体制を作りたい。延いて趣旨賛同を求める便りを貰いましたが、その冒頭に「九州地区演劇講習会」云々とありました。恥ずかしいことですが、私には、そのような講習会が、どんな形でなされているかも知りません。、県内の各劇団の存在も動向も存じません。ぜひ横の連絡を計るために、県内の各劇団が参集でき る呼掛けを芸振事務局でしていただきたい。

県民演劇は大きな魅力です。設備の整った会場で、各分野で活躍されている個々が合同し、高度な技術で華々しく公演する、素晴しいことです。成果も大きいでしょう。その反面、かって私と仲間4人で、福岡県の星野村から日田郡の鯛生まで、徒歩で4日間の移動公演を行ないました。――星野村では製材工場で、或る部落では個人の座敷を借りて。それでも演目が終わって帰ろうとしない観客の顔。顔。　でも、次の部落では、有力者から場所も貸さない、泊まることも禁じられました。途方に暮れていた私達に、「お困まりでしょう。私の荒屋でよければ……」と、密かに招じて下さったお百姓さんに涙を流した仲間の女の子。そして夕飯に、私達の炊いた米飯と交換した粟芋粥の不味くてザラザラした舌触り。でも翌朝、有力者に気づかれぬうちにと、霜柱をふみしめて別れを告げたお百姓さんの家に、小高い道路の上から手を振って、力一杯歌った歌声の響――私には今だにあの感激が忘れられません。

県が主催する芸術祭にも言えることですが、あまりにも限られた県民だけえのプログラムが目立ちます。

文化運動の高まり、即、大作発表主義だけではないと思います。時には大担に、上津江村の奥深い学校で開幕行事を。閉幕行事は米水津村でも、催し演じられる企画が欲しいものです。

編集後記

この「芸振」第１号は45年８月に発刊されている。当時県芸術文化振興会議では日常活動の一つとして、ぜひ定期に会報を発行したい、というねらいからはじめられた。その年から事務局次長制がもうけられた。この編集は事務局次長が担当することになり、やむをえず、お鉢が回ってきた。

編集計画その他すべてがまかされたので、二年計画で県内の芸術文化活動の「現況と課題」というテーマで各ジャンルを紹介した。当時は８ページで隔月発行、目のまわる様な忙しさであった。一つの編集を終えた時には、次の号の原稿依頼を出さなければならない。

というありさまで、二年間休む暇なくつづいた。この間は芸振会議事務局が文化室であり田村卓夫室長（現教育センター所長）時代であった。

次の年から文化課に昇格、矢野朔雄課長が就任した。いい機会でもあったので編集も一新したいと思い担当を交替させてもらった。その２年間の半分は文化課で編集を担当していた様である。しかし在野的ニオイが出ない、という理由から49年度再度編集係として仕事を引きうけざるを得なくなった。

48年度の編集は〝市町村の文化活動〟が目標であったが、49年度に入って県芸術文化振興会議と県芸術祭が丁度10周年を迎えることになるので、このへんで〝もう一度歩いてきた道をそれぞれふりかえってみよう〟ということから、特に昭和20年、30年代の県内各文化活動を回顧する特集をはじめた。そして今までの隔月発行を年４回とし、その分ページ数をふやすことにした。

49年度は「美術」、「芸振、芸術祭」、「文化財」、そしてこの号の「演劇」で終わる。50年は６月「音楽」、９月「文芸」、12月「地域文化、生活芸術」、３月「舞踊」の計画である。

ことし一年の編集をふりかえってみて、一番困ったことは原稿が集まらないことであり、資料が入手しにくいことである。この号「演劇」の場合でも、たくさん写真を入れたいと計画したが、結局新聞社にも20年代の演劇の写真はなかった。一点だけは掲載しているが県演劇祭の「あすなろ」の写真も貴重な資料である。この際みなさんもお手持の文化活動の記録写真は大事に保存され、、何かの機会に持ちよって、「大分県文化活動記録写真集」というのを出すと大変意味があるのではないかと思っている。芸振会議も将来はこのくらいな仕事をする必要があろう。

とにかく原稿依頼があった時には心よく引き受けて期限までに提出されるようお願いいたします。

また今までの編集についてのご意見、これからのご希望などありましたらご遠慮なく申しつけください。

（Ｓ）